



渦中から 2020-2022

Under the Covid-19, 2020-2022

佐藤李青 Sato Risei

はじめに 緊急事態宣言の日考えたことから

2020年4月7日。国内7都府県に緊急事態宣言が発令された。この日は市ヶ谷のオフィスに出社していた。帰り道の駅や電車ではマスクを着けた人たちがスマホを開いて、首相会見のニュースを見ていた。SNSのタイムラインを眺めていると、今夜はスーパームーンなのだという。駅を出て、夜空を見上げれば、真円を描いた月が明るく輝いていた。そして、ふと、ああ、今回は自分が“当事者”なんだと気がついた。それから、日々の変化がそれまで以上に目につくようになったと思う。

当事者とは、東日本大震災後の東北にかかわるなかで何度も聞いたことばだった。2011年に立ち上がった『Art Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業、ASTT）』に携わり、東京と東北を行き来するなかで、被災は目に見えた被害の有無にかかわらず、それぞれの人のなかに、それぞれのかたちで存在することを知った。その意味で、誰もが何らかの被災の当事者であった。そのことを新型コロナウイルスの影響が増すほどに思い出すようになった。

そちらは大丈夫ですか？ あるときから他の地域で暮らす人たちと連絡をとると、そう聞かれることが増えていった。ニュースが伝える首都圏の感染者数は、他の地域よりも圧倒的に多かった。そのなかで暮らしていると、身に迫ってくるような脅威を実感することは少なかった。それでも、確かに生活は変化していた。医療に従事する人たちの現場の厳しさや、身近で感染した人の話を聞きながら、もっと大変な人たちがいる……ということばを、ぐっと飲み込んで、あえて自らが“渦中”にいることを自覚してみる。そうすることで見えてくるものがあるだろう、と日々の出来事を記録しはじめた。Wordに書き溜めた記録を、約1ヶ月後にnoteで記事として公開した。日々の業務が話題の中心だったため、タイムラグをつくることで公開出来る情報も増えるだろうと考えた。先が見えないコロナ禍のなかで、即時的に情報を出すのではなく、少し時間を置いて確認してから公開したかったこともある。あえて公開を前提としたのは続けるための自分へのプレッシャーでもあった。

ほとんどの記録は、アーツカウンシル東京という組織で働き、東京アートポイント計画とTokyo Art Research Lab、Art Support Tohoku-Tokyoという3つの事業を担当するなかで生まれたものだ（各事業については次頁の「用語解説」を参照）。いずれも地域のなかで芸術文化活動を行うことや、その担い手の支援を目的にしている。自分たちで、すべての企画を実施するのではなく、常にパートナーとなる人たちがいる“中間支援”の仕事である。目に見えたイベントを行うだけでなく、日常的なコミュニケーションを重ねることから企画の運営の方法や体制づくりまでを行うことが仕事の範囲だ。

そうした仕事の性質から、日記のなかでは、繰り返し同じ事業名や人名などが登場する。日々の流れを重視し、注釈は最低限のものに留めた。通して読んでもらえば、コロナ禍のなかで右往左往しながら、どのような議論が重ねられたのかが垣間見えるだろう。

コロナ禍になって変わったこと、考えたこと、気がついたことがあった。それほど時間が経っていないのに、すっかり忘れてしまったことも多い。“あのとき”の感覚を思い出し、これからを考え直すきっかけとして、この記録を使ってもらえたらと思う。

用語解説

アーツカウンシル東京

都内で文化施設の運営や文化事業の実施を行う公益財団法人東京都歴史文化財団の1組織。東京都の文化政策にもとづき、新たな芸術文化創造の基盤整備や東京の独自性・多様性を追求したプログラムに取り組む。助成事業や活動支援などを行うなかで、筆者は、NPO等の非営利組織をパートナーとした事業実施や担い手の育成などを担う部署（事業部事業調整課事業推進係）に所属している。

東京アートポイント計画

東京都、アーツカウンシル東京、NPOが共催し、社会に対して新たな価値観や創造的な活動を生み出すための「アートポイント」をつくる事業。複数年をかけて、持続的なプロジェクトづくりを、専門スタッフの「プログラムオフィサー」が伴走することでサポートする。都内各所で8〜9件のプロジェクトを実施し、1件につきプログラムオフィサーが2〜3名で担当。1人が複数のプロジェクトを担当し、日々、共催事業のパートナーとなるNPOメンバーとコミュニケーションを重ねる。

Tokyo Art Research Lab (TARL)

アートプロジェクトの担い手のためのプラットフォームとして、時代に応答したアートプロジェクトをつくる学び合いの場と、現場の課題やこれから必要な技術について考える研究・開発を行ってきた。2010年に始動し、秋葉原のアートセンター「3331 Arts Chiyoda」内の「ROOM302」を拠点としてプログラムを展開（〜2023年）。コロナ禍で対面型の活動がしづらくなるなか、ROOM302に配信スタジオ機能を配備した「STUDIO302」を開設。YouTubeチャンネルを通じて数多くの配信プログラムを実施した。

Art Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業、ASTT）

東京都、アーツカウンシル東京が、東京アートポイント計画の手法を使い、現地のアートNPO等の団体やコーディネーターと連携し、被災地域（岩手県、宮城県、福島県）で事業を展開。既存のプログラムを持ち込むのではなく、その土地に暮らすさまざまな分野の人々が主体となり、交流プロセスを重視したアートプログラムや、それを支える仕組みづくりを行う。2011年7月に開始し、2021年3月に終了。震災10年目の2020年度は、コロナ禍の1年目と重なり、ウェブサイト『Art Support Tohoku-Tokyo 2011-2021』運営を軸としたオンラインプログラムの展開に苦心した。

目次

001 | はじめに 緊急事態宣言の日に考えたことから

002 | 用語解説

006 | 凡例

渦中から 2020

008 | 花はどこへ行った？ | 4/21~4/27

010 | 無数のグラデーションがある | 4/28~5/4

012 | 自粛警察にはならない | 5/5~5/11

014 | 思いっきり声を出してはじめることが出来るだろうか | 5/12~5/18

017 | 急速に気分は解除されてきている | 5/19~5/25

019 | 個々人の「感じ方」に、どう対応していくのか | 5/26~6/1

022 | 近頃のハッシュタグは声高だ | 6/2~6/8

025 | どれだけ新しい人に会っていないのか | 6/9~6/15

027 | 「氣にする人たち」と「氣にしない人たち」の間がどんどん開いていっている | 6/16~6/22

030 | ひとつの区切りが付いた | 6/23~6/29

033 | 自分の判断というより周囲の受け止め方が気になっている | 6/30~7/6

036 | 世は空前の日記ブームである | 7/7~7/13

039 | 議論の潮目が変わるタイミングなのだろう | 7/14~7/20

043 | 明日は予定通りならばオリンピックの開会式だった | 7/21~7/27

045 | コロナのおくすりがはやくできますように | 7/28~8/3

048 | この「怖さ」は何なのだろうか | 8/4~8/10

051 | 移動に飢えているからか、夏バテか | 8/11~8/17

053 | ひたすら画面とにらめっこする | 8/18~8/24

055 | 8月はどこへ行っただろうか | 8/25~8/31

057 | そもそもから考えましょう | 9/1~9/7

059 | 対面の打合せが必要なタイミングなのかもしれない | 9/8~9/14

062 | やっぱり適度に遠出はしたい | 9/15~9/21

064 | 実際にやろうとすると、いろんなことが見えてくる | 9/22~9/28

066 | ログインの反対語は捺印なのか | 9/29~10/5

068 | すでに忘れていることも多い | 10/6~10/12

070 | どんときも文化の秋はやってくる | 10/13~10/19

- 071 | うまくしゃべれないなと思うことが多い | 10/20～10/26
- 073 | この経験の何を忘れないようにすればいいのか | 10/27～11/2
- 075 | 日々、葛藤のなかで書いています | 11/3～11/9
- 077 | プロジェクトがまとう「状況」に目がいってしまう | 11/10～11/16
- 079 | 体調とパラレルに状況が悪化している | 11/17～11/23
- 080 | 着実に広がっている | 11/24～11/30

2020 年リレー日記から

- 084 | きちんと終わることも、次をはじめするためには必要だ | 3/8～3/14

続・渦中から 2021 / 2022

- 090 | 風景が変化しないときこそ、記録から変化を捉える | 6/21～6/25
- 092 | 風あたりのいい扇風機が気になっている | 6/28～7/2
- 094 | 「かんせん」を変換したら「感染」になった | 7/5～7/9
- 097 | オンラインで足りないものがあるという気持ちも拭いきれない | 7/12～7/16
- 099 | 発端を忘れてるのは、ちゃんと手法に落とし込まれた証なのだろう | 7/19～7/21
- 101 | 質疑応答で手があがらないときの緊迫感是对面のイベントと変わらない | 7/26～7/31
- 104 | 「答え探しゲームにはしたくない」「経験したことのみで話せないか」 | 8/3～8/6
- 106 | 想像は出来る。でも、実感が足りない | 8/10～8/13
- 108 | メモに動かす手が追いつかないほどに、いろんなことが動いている | 8/16～8/21
- 111 | 状況は厳しいという認識を共有する | 8/24～8/27
- 113 | オンラインに「変更」するだけではないやりかたが必要なのではないだろうか？ | 8/30～9/3
- 115 | 当分は終わらないだろうと思いつつ、どこかで終わりを期待している | 9/6～9/10
- 117 | 思いがけず、いいとっかかりを見つけた | 9/13～9/17
- 120 | 手放してはいけないものがある | 9/21～9/26
- 122 | 「解除」という実感は、あまりない | 9/27～10/1
- 124 | 「解除」と「緩和」の即効性は強い | 10/4～10/9
- 126 | 「すっかり減ってますね」と言った後には『第6波』は来るだろうし」と付け加える | 10/12～10/15
- 128 | 記録をする手も緩んでしまう | 10/18～10/22

-
- 130 | 「今のうちに出来ることをやっておこう」と言い続けた数ヶ月は終わるのか？ | 1/5～1/7
 - 131 | 優先順位を付けるというか、全部やりたい | 1/11～1/14
 - 133 | 話すことの効用は大きい | 1/17～1/21

- 135 | ライトなかかわりがしなやかな力をもつことがある | 1/24~1/28
- 137 | 来週にすれば出来るのか、もはや誰もわからない | 1/31~2/4
- 139 | 下り坂に入ったのだろうか? | 2/7~2/10
- 141 | 覚えておかないと、あっという間にあの頃は戻ってくる | 2/14~2/18
- 142 | 「絵図」を共有するやりかたが必要なのだろう | 2/21~2/25

続々・渦中から 2022

- 146 | 継承は、受け手の勘違いからはじまる | 5/9~5/13
- 148 | 「オミクロン株対策が行われるよりも前の扱い」に戻す | 5/16~5/20
- 149 | コロナ禍も3年目にして、ようやく掴みかけた | 5/23~5/27
- 150 | 思考のスケールを変えることで対象との距離は変化する | 5/30~6/3
- 151 | いろんなものが再開してきている | 6/6~6/10
- 152 | 「やろうとしたこと」は何であったのか | 6/16~6/17
- 153 | ここにも表現による継承がある | 6/20~6/24
- 155 | マスクは暑さで外すのか? | 6/27~7/3
- 157 | 「以後」になると、「以前」が遠くに感じられる | 7/4~7/8
- 159 | 再開ムードは反転するのだろうか | 7/11~7/15

- 162 | おわりに マスクを外す前に

凡例

- ・ note (https://note.com/ap_sato) に掲載した記事（マガジン「渦中から」、「続・渦中から」、「続々・渦中から」と、ウェブサイト『Art Support Tohoku-Tokyo 2011→2021』内の「2020年リレー日記」（2021年3月8日～3月14日、編集：川村庸子）に加筆修正を行なった。
- ・ プロジェクト名、人物名等の固有名詞は、基本的に初出以降は略称や苗字のみの表記を用いた。
- ・ ウェブサイトのニュース記事で現在アクセス出来ず、不明なものは出典の記載を省いた。
- ・ 注釈は、筆者の業務にかかわるプロジェクトの概要のみ記載した。

渦中から

2020 年 4 月 21 日～11 月 30 日

花はどこへ行った？ | 4/21~4/27

2020年4月21日（火） 自宅

終日在宅勤務。『小金井アートフル・アクション！』の宮下美穂さんからメールの返信（*1）。昨日「在宅が続き、小学校も保育園もなく、なかなかサラエボ感が高まってまいりました」と書いて送ったら、件名が「花はどこへ行った、ですね」と返信。ピーター・ポール&マリーのYouTubeリンク付き。

ユーゴスラビア紛争のなかで、包囲攻撃を受けるサラエボの日常を記録し、「旅行案内」という体裁でユーモアを交えてまとめられた『サラエボ旅行記』。2週間前の打合せで宮下さんは「いま『サラエボ旅行案内』のようなものをつくるときかもしれない」と言っていた。このことばが念頭にあって送ったメールだったけれど、反戦歌で返されるとは。いま、過去の「渦中」の記憶があらゆる場所呼び覚まされているのだろう。

文化政策研究者・太下義之さんの提言がFacebookのタイムラインに流れてきた。重要な指摘。

現状で、文化団体が国や地方自治体等から受けているさまざまな支援は、概ね「助成金」です。これらの助成金の補助率は50%が上限であるケースが多いようです。逆に言えば、残りの50%にいては、自己資金で調達することが求められています。そして、文化団体はこうした助成の形態に対応するため、公演や事業におけるチケット代金や入場料等で、この自己資金分を回収するという事業モデルを構築してきました。しかし、現下のようにそもそも公演等が実施出来ない状況においては、もはやこの事業モデルは成立しません。すなわち、文化団体の支援に関しても、従来とは全く異なる資金の提供

方法が必要だと考えます。このことは、今後コロナの影響が軽微となる「コロナ後」の文化政策においても同様にあてはまります。

（「新型コロナウイルスに向き合う文化政策の提言」

Active Archipelago、2020年4月21日）

Zoomで『Art Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業、ASTT）』のウェブサイトとジャーナル『FIELD RECORDING』5号の企画会議。誌面企画のテストケースとして日記を書くことになる。

2020年4月22日（水） 自宅

朝からASTTの今年度の動きを整理する。家のなかのストレスが、かなり高い。いま手掛けていることを、出来るだけ早く進めたい。そうは思いつつも、身体が追いつかない。夕方からオンラインで係会（東京アートポイント計画スタッフの定例会）。文化庁より厚労省の対応になる前に動き出さないといけない。そう勢いでしゃべりながら、厚労省「生活を支えるための支援のご案内」がFacebookでシェアされていたことが頭をよぎる。

コロナの渦中で、どう記録をとるのか。文章を書くのは難しい。写真に撮るものがない。SNSも、しばらく更新していない。ふとコミュニケーションツールに残せるかもしれないと思う。在宅に切り替えてから、日々の業務に細かいコミュニケーションが多いことに気がついた。Slack、メッセージ、メール……。ふだん口頭でやりとりするようなことが文字になる。何人かとメールするときに、あえて現状認識を多めに書くようにしていたけれど、それがいけるかもしれない。

¹ 小金井市芸術文化振興計画推進事業として2009年度に始動。市民がアートと出会うことで心豊かな生き方を追求するきっかけづくりを目指し、「小金井アートスポット

シャトー2F」を拠点に、さまざまなプログラムを実施。東京アートポイント計画では、小金井市とNPO法人アートフル・アクションが共催のパートナーだった。

2020年4月23日（木） 自宅

昔から日記が苦手だった。かつて「継続は力なり」と書いて、その後が空白の日記帳を見つけて愕然としたことがあった。今回は三日坊主にはならないはず。最近にしては珍しくオンラインミーティングがなかった。Tokyo Art Research Lab (TARL) の企画づくりの参考にドラマトゥルクの長島確さんが書いた『アトレウス家の建て方』を読み返す。震災前後に上演予定だった「墨田区在住アトレウス家」、そのメンバーに宛てたメール、震災へのリアクションとしての「豊島区在住アトレウス家」のことが書かれている。

震災後の記述に「ゴドーを待ちながら」が出てこないかを探す。なぜ、危機的な状況で「ゴドーを待ちながら」が上演されるのか。いつか考えてみたいと思っていた。いまがそのタイミングかもしれない。そう思って、数日前にスーザン・ソントグの『サラエボで、ゴドーを待ちながら』を読んだ。そしたら、かもめマシンの劇作家・演出家 萩原雄太さんが2011年に上演した「福島でゴドーを待ちながら」のドキュメントをnoteで公開していた。長島さんはベケットの翻訳者。何かあるのではないかと思ったが、なにも見当たらなかった。

本の終わりでは「想像力を働かせることの重要さ」に触れられていた。「いまあるものにたいする想像力」。「いま目の前にあるもの。いま遠くにあるもの。いまあるものの向こうにあるもの。いまあるものの前にあったものや、いまあるものの後にあるもの」。

2月に発刊した『FIELD RECORDING』3号と4号で浮かび上がってきたものと重なった。このふたつの号では、東日本大震災後と、過去の出来事や他の厄災を並べて取り上げた。震災から10年目。いま想像力が向き合うべきトピックなのだと思っていた。たいして真新しいことではない。気になっているから目がとまるのかもしれない。でも、いまも、すべてここに修練されていくように感じている。

2020年4月24日（金） 自宅

朝からオンラインミーティングをひとつ。短い昼をはさんで、すぐに2本目。どちらも終了時に次の予定を決める。カレンダーはオンラインミーティングで埋まっている。午後は休み。数日ぶりに外出する。といっても、近所のコンビニまで。

この1年で自宅の本の数を減らしてきた。読みたい本があれば、まずは図書館のウェブサイトで蔵書を調べて、予約する。話題の新刊は電子書籍で読むことも増えた。本との付き合い方を変えてきた。でも、いま図書館は閉まっている。そんなことを考えたこともなかった。ミーティングで書名が出るたびに、小さな不都合を感じる。ものを考える道具が足りない。ホームセンターに本はない。

ダンボール4箱分。数日前に買取を依頼した古書店からは、すぐに返信が来た。「買取大歓迎です。主な仕入れ先だった市場も封鎖中なので、とても助かります」。

2020年4月25日（土） 自宅

「緊急宣言 解除地域ごとに判断か」。Yahoo!のトップニュースの文字を見て、福島のことを思い出す。この状況は震災後の福島のような。立場が逆転している。東京が渦中になるとは。何度かそんな会話をした。実際にはいろんなことが違う。けれども、どうことばにすればいいかわからない状況に対しては、過去の出来事のことばを使って語り出すことしか出来ない。コロナの影響が出始めた頃に、戦時中のようなことばを使ったことがあった。

「ようだ」で言おうとしていることを見定める必要があるのだろう。

見えない戦争状態。それは平時と対立するのではなく、いつもそこ／ここにある。日常のなかに、じつはある。今回、とつぜんよく見えるようになったけど。

（長島確『アトレウス家の建て方』

公益財団法人東京都歴史文化財団、2013年）

近所のホームセンターに乾電池を買いに行く。入店は代表者1名でお願いします。買い物は30分以内でお願いします。レジでは距離をとってください。入口に案内がある。店内アナウンスも流れる。数分自転車に乗っただけなのに、足が少ししなわなする。これはまずい。

2020年4月26日（日） 自宅

晴れているけど風が強い。電子書籍で村上春樹『猫を棄てる』を読む。夕方に Zoom を1件。無料アカウントだと40分で切れる。少し前まではギフトで継続できた。いよいよ、有料へ移行せよという意味なのか。ネットの回線が安定しない。

新たな企画について仙台のメンバーと打合せ。ネーミングやソーシャル・ディスタンスを踏まえた新しい装置づくりなどアイデアを交わす。17時を過ぎて流れる非常事態宣言のアナウンスを Zoom 越しに聞いてもらう。数日前から夕方だけでなく朝にも流れるようになった。

2020年4月27日（月） 自宅

いまは「祈り」がないのだという。祈りとは具体的な誰かではない他者を想定することなのではないだろうか。家にこもり、誰にも会わない。それは会いたい人に会えないだけではない。いまだ出会ったことのない人に会える機会を失っていることもある。

信仰のある人にとって、信仰のない人はこわい。という話を大学の頃だったか聞いたことを思い出す。信仰とは自分のなかに常に他者をもつことなのだと思う。自らの判断を誰かに委ねることは違う。冷たい雨が降っていた。

無数のグラデーションがある | 4/28~5/4

2020年4月28日（火） 自宅

朝から気分が晴れない。Zoom は3本。午前にはひとつ。午後にはふたつ。画面共有と大人数でのミーテ

ィングを経験する。明後日のミーティングをひとつキャンセル。返信が出来ていないメッセージが溜まっている。

近況報告の返信を考える。さっと返信してしまえばいいものが、一番時間がかかる。いまの感覚を素直に伝えるものが。

各現場はメディア・コンテンツづくりに移行しはじめています。それはそれで新たな手法をつくったり、これまでにない飛距離のある事業になりそうです。が、ローカルで活動しているメンバーは会えない（会にくい）、子どもがいると生活でいっぱい。でも、だからこそ、何らか文化的な取り組みが必要だ、どうすればいいのか、という議論になるのを繰り返しています。近くにいる人たちが安心して会う方法が必要なんですよね。そして取り組むのに、単独の主体ではなく、生活スタイルの異なる複数のコミュニティが連携して動く必要があるのではないかなと思います（あ、それが市民社会なんですかね？）。隣にパスを出し合うような。

と、今日はここまでしか書けなかった。続きは明日書こう。

2020年4月29日（水・祝） 自宅

いい天気。在宅勤務がないだけで気分はだいぶ違う。とはいえ、日々を過ごす場所は変わらない。ちよこちょこ公園やスーパーへ。昨日途中までだったメッセージを勢いで書き終えて送信。

いまは勇んで何かをするよりも「落ち着いた」と言われるタイミングで疲れないようにしたいな、と思ってます。みんな「当事者」なんだけど、これまでの災害とは違い、被害や困っている状況が見えにくいので、当人がそうだと自認出来ないことも多いんだろうなと。そうす

ると、いまこそ、と言っている人たちも、知らず知らずに疲れてしまわないかと、ちょっと心配しています(人ごとではなく)。なんとなく、震災後に現地の生活者であり、支援者になった人たちが仮設住宅ができて、少し状況が落ち着いた頃にどっと疲れていたことを思い出します。あつという間に戻ってくる日常に向き合うタイミングが一番正念場になるのかなと。いま、これまでの場の「再開」を目指す人たちと、変わってしまった日常のなかで(顕在化した課題に対して)新たな方法を模索する人たちがいて、後者に立ったときに、あれはなんだったんだろうか、とならないように……

すぐに返信をもらえたけれど、その返信を考えているうちに力尽きる。数日後に送ればいい。気安く返せる相手だから、逆に悩む。だからこそ、無理もしない。

2020年4月30日(木) 自宅

Zoom は昼から1本、夜に1本。どちらも東北の話を。岩手県はコロナ感染者が0人。逆に気が張っているのだという。自分が最初の発症者になりたくないという気持ちが強くあるのかもしれない。県外ナンバーの人は入れないお店もあるという。本当なのか…。『ぐるぐるミックス in 金石』(*2)の今年の動き方の打合せで聞いた。

「ウイルスじゃなくて、ほとんど人がもたらした問題だけだね」。エイズ・ポスター・プロジェクトやダムタイプに関わってきた、美術家 きむらとし

ろうじんじんさんのことばが響く。当時「Safe Sex」ということばに対する違和感から「Safer Sexy」ということばを使っていたのだという。相対的により安全で、何を性的なものだと感じるか。「感じ方」に焦点をあてた言い方。いまの状況と重ねて聞く。「歌番組なんだと思う」。『ラジオ下神白 あのと きあのまちの音楽からいまここへ』の打合せで、プロジェクトディレクターのアサダワタルさんから、いつもながらの謎提案(*3)。歌あり、回想あり、中継ありの複合的な番組づくりを構想する。状況を俯瞰して手法をつくっていくのではなく「ひとりとひとりと向き合って、動き方を変えていく。それがラジオ下神白らしいのではないか」。編集者の川村庸子さんの言うセリフに思わず頷く。

6月から下神白団地を再訪しながら、新しい訪問方法も検討していくことに。そう、試しながら進めていくしかないのだろう。

2020年5月1日(金) 自宅

ニュースでは、朝から緊急事態宣言が1ヶ月延期になるという情報が更新されていく。Zoom が2本。小金井アートフル・アクション!と世田谷の『移動する中心 | GAYA』(*4)。どちらのエリアでも学校が5月中休校延期になることが話題に上がる。そして、どちらも「いま」の記録の話になる。オンラインミーティングをするようになって、キーを打つと音が伝わってしまうから鉛筆で裏紙にメモをとるようになった。手すきぎに書いているようなものだけど、いい記録になるのかもしれないと思う。自分のなかで記録に対する態度が変わ

² 岩手県金石市のかまいしこども園を舞台にアーティストのきむらとしろうじんじんと大西健太郎が、園の保育士の先生や地元ボランティアスタッフ、子供たちと一緒に「あそび」を生み出すプログラム。2016年度からASTTの一環として開始。企画・運営の「一般社団法人谷中のおかって」が、都内で開発した「ぐるぐるミックス」の枠組みを活用している。

³ 福島県いわき市の県営復興団地・下神白(しもかじろ)団地を舞台に、文化活動家のアサダワタルが中心になり、住民のまちの思い出と当時の馴染み深い曲について

取材・交流をするプロジェクト。ASTTの一環として2016年度に開始。

⁴ 世田谷区内で収集・デジタル化されてきた、昭和の世田谷を映したホームムービーを活用した語り場をつくるコミュニティ・アーカイブプロジェクト。東京アートポイント計画の一環として2019年度に開始。NPO法人記録と表現とメディアのための組織[remo]と公益財団法人せたがや文化財団 生活工房が共催のパートナー。企画・運営はAHA! [Archive for Human Activities/人類の営みのためのアーカイブ]。

っていることに気がつく。5 月になったことが大きいのか。やる気スイッチというつか。

夜の Yahoo! ニュースには「首相 緊急宣言延長 4 日決定」の文字。でも、その下に並ぶ「米大統領武漢研究所説に自信」が気にかかる。イラク戦争のはじまりを想起する。

何か明確なことばや出来事があったわけではないが、予想以上にこのしんどさは誰かと共有しづらいものなのだと思う。数日前にやりとりした松山ブンカ・ラボの戸館正史さんとのメッセージにあったことばがよみえる。

ある識者がコロナは誰もが当事者となるという意味で民主的な危機だとか言っていました。そんなことはないんじゃないかな、とも思います。もちろん、みんなが当事者なんだけど、みんな当事者であるということは、ほんとうは平時からそうなんですよね。いまは、当事者と当事者がつながっているんだけど、そこに無数のグラデーションがあるというのが、かなり目に見えている感じがします。

2020 年 5 月 2 日（土） 自宅

連休に突入。ホームセンターで観葉植物の植え替え用の土と鉢を買う。全国的に夏日。半袖でも十分な暑さ。親戚とオンラインで話をする。

ASTT に関連し、『まっぶたつの風景』に収録された畠山直哉さんの文章（「せんだい・メディアテーク・アトモスフェール」）を思い出し、読み返す。このテキストのまなざしが好きだ。

2020 年 5 月 3 日（日） 自宅

外出せずに過ごす。クラウドファンディングを数件申し込む。本来政府が補償すべきことを民間がやっている。クラウドファンディングに手を挙げることが出来る人は限られている。そんな批判があるのは知っている。そうだと思うこともある。でも、どっちかではなく、両方あっていいのでは

ないか。

何かを知ることが大事なのは、何も変わらないという無力感のためではなく、何かが変わるための道筋を見出すために必要なのではないだろうか。名言風なことを思い付く。もう少し、うまく言いたい。

「美術館などの活動再開可能に」というニュース記事が出ていた（「特定警戒都道府県で「美術館など再開可能に」 経財相」『日本経済新聞』2020 年 5 月 3 日）。

西村康稔経済再生担当相は記者会見で、新型コロナウイルスの重点的な対策が必要な「特定警戒都道府県」でも公園、博物館、図書館や美術館は感染防止策を徹底した上で活動を再開できるようにすると述べた。

SNS では、どうすれば「徹底した」といえるのか、という意見もちらほらと。最近では海外の美術館や博物館の基準も出始める。

2020 年 5 月 4 日（月・祝） 自宅

昨日、迷っていたクラウドファンディングと寄付を数件、一気に申し込む。出来るだけ考えることを減らしたい。どうなるかは分からない。5 月 31 日まで緊急事態宣言の延長が決まる。

自粛警察にはならない | 5/5～5/11

2020 年 5 月 5 日（火・祝） 自宅

緊急事態宣言延長の首相会見で「公園や博物館、美術館、図書館への外出は、感染防止策の徹底を前提として全国的に可能とする考え」が示されたことが、にわかにざわついていた。SNS では海外事例も含めて、開館した際の対応策がシェアされていた。「新しい生活様式」ということばが現れた。数週間ぶりに夕飯の調達のため駅近くまで行ってみる。思った以上に人がいるし、店舗が開いている。飲み屋の呼び込みもあった。家でじっとして

いた生活はなんだったのだろうか、と少し複雑な気持ちになる。でも、自粛警察にはならない。夜は屋根裏ハイツのライブカムパフォーマンス「ハウアーユー？」をYouTube Live で観る。

2020年5月6日（水・祝） 自宅

連休最終日。天気が悪い。夕方にはカミナリ。昨夜は遅くに緊急地震速報が鳴る。千葉で震度4。おとといは10時前に鳴る。どちらも揺れは、ほとんどなかった。避難所での感染対策は、何度か話題になっていたけれど、これから増えるのだろうか（大雨や台風の季節もやってくる……）。

緊急事態宣言は各地で対応に変化が出てきた。「特定警戒都道府県」以外では、再開する美術館の情報がちらほらと出てきた。いつの間にか、また新しいことばが……。政府は「容認」するのだという。「自粛」もそうだけど実施主体が自ら意思決定をしているかのような言葉遣いが気にかかる。本屋ロカンタンから届いた『地域アートはどこにある？』を読みはじめる。お目当ては美術家の藤浩志の学生時代を小説化した作品「嶋タケシ」。

2020年5月7日（木） 市ヶ谷

ほぼ1ヶ月ぶりに出社。押し合うほどではないけれど、電車にはそれなりに人がいる。なにもかも普通に見える。閉まっている店がある。出社している人は少ない。それでも変わっていないと思う。淡々と仕事をこなす。日常に戻るという感覚よりは、変わらず至極当然のように身体が動く。そして歩く。これが忘れるということなのかもしれない。

ASTTに関連した契約方法の相談。東日本大震災後の経験は、ほかの出来事に役に立つ。「もう、東北のことだけじゃないよね」と。そんなやりとりが発生する。ここ数年で同じような会話をすることが増えた。その意味を考える。

目の前で何らかの厄災に直面する。当事者に「なる」のは難しい。当事者とは、そう認識する他者の

存在が必要になる。そのためには自らの置かれている状況を他者に伝える必要がある。でも、経験したことがないことをことばにするのは難しい。ほかの経験を知ることは、自らの経験を語り出すために必要なのではないだろうか。

2020年5月8日（金） 自宅

朝早くに目が覚める。6時前から活動を開始する。鼻水が止まらない。熱はない。

午前には仙台市市民文化事業団の「多様なメディアを活用した文化芸術創造支援事業」が公開。コロナ状況下の新型助成。オンライン、オフライン問わずメディアベースの活動が対象。期間は6月中旬～10月31日まで。創造・発信事業（個人上限30万円／団体上限50万円）と基盤づくり（上限100万円）の2種類。50～70件程度（予算の範囲内採択）。助成率は10/10（収入や自己負担金の有無を問わず、人件費も計上可）。この緊急時に実現したやりかたが平時へも繋がってほしいもののひとつ。

午後にZoomを1本。NPO法人記録と表現とメディアのための組織（remo）の松本篤さん、水野雄太さんと。いったん、これまでのGAYAの流れを離れて、この状況下で取り組むべきものの話をする。GAYAを企画するAHA!（Archive for Human Activities／人類の営みのためのアーカイブの略称、remoが母体のプロジェクト）は「残されたもの」を使って何が出来るかをやってきたが、いまはこれから数十年後に何かしらの意味をもつ記録の実践が必要なのではないか、と。こどもインタビュー（家庭内で親が子にインタビューをする）とremoscope（1分間、定点、ズームなしなど簡単なルールを使うremoが開発した映像記録手法）。ふたつの手法を組み合わせたものを試してみることになる。

2020年5月9日（土） 自宅

あつという間に一日が過ぎる。日記を書き忘れる。昨日のことが思い出せない。そんな日もある。

2020年5月10日（日） 自宅

東京大空襲・戦災資料センターから届いていた新聞記事のコピーを読む。賛助会員のお知らせと一緒に送られてきていたけれど、読めていなかった。今年の3月10日の東京大空襲関連記事のスクラップ。コロナの影響で75年の「節目」の式典やイベントは軒並み中止。参加者に高齢の人が多くことへの配慮も働いている。2018年で戦後生まれは83%。体験者が減っていく社会で、どう戦争の記憶を継承していくのか。繰り返し語られていた。ゲンロンウェブ直販で買った『哲学の誤配』と『新対話論』が届く。Twitter上には「#検察庁法改正法案に抗議します」が繰り返し流れていた。

2020年5月11日（月） 自宅

猛暑日。特定警戒区域以外の地域で緊急事態宣言解除が現実化してきた。14日には実施されるという。急速に日常に戻っていく感覚がある。一方で小学校の休校と保育園の登園自粛は続く。駅のほうまで歩いてみると、いくつか飲み屋が開始されている。仕事帰りの人たちが多く。バスも混雑というほどではないけれど、すべての席が埋まっていた。

日常に戻るときに起こる分断。戻れる人たち、戻れない人たち。そもそも、日常の定義は戻れる人たちの側にあるのではないだろうか。

今日は11日。東日本大震災の月命日。河北新報のオンラインニュースに「震災知らない子増」6割 苦慮 小中の伝承学習 宮教大と河北新報社調査の見出し。震災伝承学習の課題は「震災を知らない子どもの増加」「授業時間の確保」「被災した子どもらへの配慮」の順で回答が多かったのだという。「亡くなった児童や親を亡くした遺児がおり（詳細な震災学習は）まだ早い」（岩手県の小学校）ということばもあった。

思いっきり声を出してはじめることが出来るだろうか | 5/12~5/18

2020年5月12日（火） 自宅

終日在宅。Zoomで会議は3本。最後の1本はリスケとなる。

オンライン会議の難しさが見える。パーツの精度を上げることは出来るけれど、全体のことを進めるのがオンラインだと難しい。パーツを組み上げれば全体が出来るわけではない。気持ち、気分、トーン、塩梅。実際に会うことで共有されていた非言語の何か。精緻にことばを駆使すれば共有可能なものなのかもしれない。でも、技術や時間、手間がかかる。会ってしまえば早い。そう体感的に理解しているものを、オンラインペースの動き方に馴染ませるには、もう少しその正体を知る必要がありそう。そうしなければ仕事はどんどんと個別化していくしかなくなってしまう。

2020年5月13日（水） 自宅

Zoomで「ジムジム会」（事務局による事務局のためのジムのような勉強会）。東京アートポイント計画の共催事業のスタッフ40人以上が参加。ギャラリービューで2画面に分かれる。全員の顔は見えない。発話した人の位置が変わる。1時間半くらいで集中力が切れそうになる。大人数がオンラインで全員発話出来る状態にしているのは難しい。間合いが分からない。全員の顔が平等に映っているのかもしれない。聞くだけで、その場にいる人がいてもいいのだと思う。

オンラインだと画面に表示されないと「いる」ことにならない。そもそも、そこにアクセスすること自体が「いる」ことの意味表示からはじまっている。表し、示す……。まじまじと「表示」の字面を眺めてしまう。

メディアのインターフェイスで、自らの存在が左右される。画面ならば映っているか。メールやSNSならば文字を書いたかどうか。「いる」ことへの表示

方法がある。

対面では発話しないけれど「いる」ことがある。何かを考えている。頭のなかでは、ことばが満ちている。声には出ない内的な会話がある。誰かの話を公の場で聞くことは、この内的な対話を触発することでもあるのだと思う。その場で、手を上げて、声を出すだけがリアクションではない。時間をかけて生まれることばもある。「表示」し合うだけがコミュニケーションではない……。

オンラインでのコミュニケーションが増えることで、いままでオフラインでどんなコミュニケーションをしていたかをよく考えるようになった。

2020年5月14日（木） 市ヶ谷

1週間ぶりの出社。半袖で家を出たけれど、少し肌寒い。朝の電車は満員ではないけれど、席は埋まるほどに人がいる。GWを過ぎた頃から気分が緩んできた。けれど、小学校の休校は続く。今週は家庭学習の時間割が送られてきた。保育園の登園自粛要請も変わらない。余裕がない。周囲の雰囲気と体感のギャップ。首都圏の緊急事態宣言が31日まで続くとするれば、この2週間が正念場になりそう。夕方に首相会見。39県の緊急事態宣言が解除された。8都道府県も21日に状況を見て判断するのだという。

終日、ASTTの契約書類作成に集中。あっという間に時間が過ぎる。夕方からZoomで、ぐるぐるミックス in 釜石の打合せ。総勢10人。今年度の動き方を議論する。例年ならば9月末から10月頭に（きむらとしろう）じんじんさんが、かまいしこども園でぐるぐるミックスをし、大槌や釜石で「野点」をする。今年は行けるだろうか。このまま行けば可能ではないか。でも、遠隔から人が移動することは、現地の人が気にするのではないだろうか。現地調整を行うNPO法人@リアスNPOサポートセンターの川原康信さんは秋のミックスと野点は「例年通り」に進めたいという。もちろん、現場の対策や園側の調整は十分に行う。そこは任して

ほしい。そのときに来て欲しくなければ、そう言うから。震災以降、そうしてきたのだから……。仮に園として可能になったとしても、保護者が不安に思うのではないだろうか。いまのままで思い切って声を出して、現場をはじめることが出来るだろうか。とはいえ、どこかで期限を切って、別プランも考えるべきなのではないだろうか。議論を重ねる。

この状況下で何が出来るのか。ぐるぐるミックスとは何をしようとしていたのか。繰り返す、じんじんさんの「そもそも」の問いかけから考えていくと、結局のところ「リモート」で何をするか、というよりも、この条件下で、ぐるぐるミックスをどうやるのか、をシンプルに考えることなのだと思う。どんなときも実践には何らかの制限がある。そのなかで目指すべきものを、どう実現していくのか。これは「いつもの」ことではないだろうか。リモートということばには、どうしても代替策というニュアンスが滲み出る。そもそも、リモートでしので「再開」を待つ議論ではないのかもしれない。

京都新聞のオンラインニュースが目にとまる。

京都市が新型コロナウイルスの影響を受けた芸術家への支援として設けた「文化芸術活動緊急奨励金」に、相談や申請が相次いでいる。7日の受付開始から1週間で250件超の申請が寄せられ、相談件数は800件近くに及ぶ。募集は17日までで、市は予算額を1億円に倍増して対応する。

「緊急事態舞台芸術ネットワーク」が立ち上がったことをboxes Inc. 鈴木拓さんのFacebookの投稿で知る。日本博物館協会や公文協（全国公立文化施設協会）が開館のガイドラインを出しはじめた。